

細谷昂ほか著

## 『再訪・沸騰する中国農村』

御茶の水書房 2005年 vii + 434ページ

いし い ゆみ  
石 井 弓

## 概要

改革・開放以降、中国経済は大きく躍進した。とりわけ市場経済化の進展によって、GDPや貿易収支は軒並み増加し、10パーセント近い経済成長率を維持してきた。このような現代中国の状況は、統計や政治制度改革など、マクロな視点から説明されることが多い。だが、一口に市場経済化と言っても、建国後40年余り貫いてきた社会主義経済体制を根本から転換する大工事なのであり、そこに暮らすひとりひとりの人生が大きく左右されたことは言うまでもない。特に「三農問題」として注目される農村部は、都市の「近代化」を支えるための食糧と労働力の供給地として、目まぐるしい変化を経てきたと考えられる。この10年、中国農村社会はどのように変化し、個々の農民はどうやってそれに対応してきたのだろうか。本書が扱うのは、そうした農民をミクロな視点から捉えた「市場経済化」である。

本書は、基本的に河北省の一農村における事例研究と捉えられる。調査対象地域の辛集市新壘頭鎮新壘頭村は、北京、天津といった大都市近郊にある比較的豊かな農村で、改革開放以後、急速な経済成長を遂げた。10年という期間をあけてこの地を再訪することで、市場経済化の「進展」による村の変化を確認することが、本書のねらいである。第1次調査は日本学術振興会の助成により、「一人っ子政策と高齢者問題」について1993年から94年にかけて行われ、前著『沸騰する中国農村』（御茶の水書房 1997年、以下、前著とする）にまとめられている。これ

に対し本書が扱う第2次調査は、岩手県学術研究振興財団の研究助成により、2003年から翌年にかけて行われた。どちらも細谷昂（岩手県立大学）を代表とする日本の農村社会学者と、河北省社会科学院の研究者との共同研究である。「市場経済化の進展」と言っても、分析の焦点は経済にはなく、経済の進展によって変化していく農村の様子を捉えようとする点に、本書の特徴があると言えよう。

研究方法には、経済学に多用される統計は用いず、個別の農家の実態をつぶさに聞き取るモノグラフの手法を採用している。実地調査の客観性を支えるのは、「客観的諸条件と主観的な意図や動機とのからみあいのなかで行為はなされ、社会現象は動いてゆく」という「社会の動きの『論理』」（前著、6ページ）である。政治政策を概観した上で、それに対する農村の実態を叙述するスタイルも、このような細谷の理論を反映しているとみられ、実際に第2章から第5章ではこうして行ったインタビューを、実態分析の機軸としている。一方、第6章、第7章は、中国人研究者により、統計資料を用いて中国の農業政策が歴史的に概観されており、それまでとは分析視点が異なる。日中の共同研究である本書の、研究方法に対する温度差がうかがわれる一面である。

細谷をはじめとする日本側研究者は、日本の農村社会学を専門としている。このため本書は、日本農村研究の蓄積を中国研究に用い、随所で日中の比較の視点が叙述される。他にも、1次調査と2次調査、政策と農民の意識、制度と実情といった比較の描写が、中国農村に対する理解を深めてくれる。読者は、農民の視点に立った市場経済化のダイナミズムを垣間見ることになるだろう。

以下ではまず、各章の内容を紹介した上で、それに対する評者の意見を述べたい。

## 各章の紹介

本書の構成は以下のようになっている。

第1章 調査の方法と対象（細谷昂）

第2章 家族生活の実態（細谷昂・吉野英岐・佐藤利明）

- 第3章 新壘頭村の行政組織と地域生活（佐藤利明・細谷昂）
- 第4章 市場経済化と農産物の販売（劉文静）
- 第5章 民営企業と環境問題（小林一穂）
- 第6章 辛集市の農業構造と農業政策（孫世芳・穆興増）
- 第7章 土地制度と土地利用の状況（穆興増・劉増玉）
- 終章 「沸騰する中国農村」を再訪して（細谷昂）

第1章では、上述したような研究手法と対象地の概要が示される。調査対象地である新壘頭村の農業改革は、現在第3次に入っているという。第1次は「生産請負制」によって農民の積極性を引き出した。第2次は「農業の社会化」であり、政府がサービスを提供し、農作業の合理化を推進した。第3次は「農業の産業化」である。農産物の生産、加工、流通を系列化するという趣旨で、穀物から経済効率の高い商品作物への生産移行や、市場と農村のネットワーク構築が目指されている。まさに、転換期にある農村である。

第2章では、この村における「家族」について、16戸の事例農家に対する聞き取りから分析している。「家族とは」という問いに対する答えは実に様々で、「戸口」（戸籍）に規定された「家族」観念は希薄化したとみられる。市場経済化が進むなか、社会変化に対応しようとする農民の思考が、家族意識に反映されたものだという。一方、1999年に行われた「生産請負制」の延長と土地の再配分では、政策としての生産請負関係に、伝統的な相続慣行が適用される傾向がみられた。家族の成員数に応じて分配された農地が、男子均分相続の慣行に従って兄弟に均等に分けられるために細分化し、農業によって生計を立てることが困難になる。このため、農外就労や農業経営の多角化が促されている。著者はこのような状況を農業経済の不安定化と危惧する。

第3章では、村の行政機構と財政状況、そして地域生活が概観される。農業の合理化を促進させた公共サービスに加えて、村の経済発展を成り立たせた要因に、互助組織や義兄弟関係が挙げられている。

また、調査時期が中国における「非展型肺炎」（SARS）の流行期と重なったことから、これへの村民委員会の対応についても調査記が付される。上からの指示による行政的措置が最末端においては共産党の「運動」として実行されており、政党と行政組織の二面を「使い分けながら動いている」（220ページ）中国の行政・統治の特質が概観されたという。

加えて第4章では、民営企業（いわゆる「郷鎮企業」）に対する調査をもとに、農産物の流通について論じている。中国では「粮食流通管理条例」（2004年）により、建国以来国の管理下に置かれてきた「粮食」（穀物）の生産・販売が自由化された。個別の農家が流通市場と向き合うことが余儀なくされた今、注目されるのが、「農業経済合作組織」である。「龍頭企業」（農産物の販売・加工を行う企業）に対し、自主的な合作組織である「農業経済合作組織」によって生産農家が農産物を供給する「龍体」をなし、「一条龍」（一筋の龍）構造を作り上げる。「龍頭企業」は国外へも製品を販売しており、多様な地域との生産・流通のネットワークに個々の農家が参加できる土着の経済システムが形成されつつある。

第5章では、このような民営企業の発展に伴う環境汚染問題が論じられている。都市と農村の戸籍が固定化された中国において、農村に建設された民営企業は余剰労働力を吸収し、「民工」（出稼ぎ労働者）の都市流入を抑える役割を果たしてきた。戸籍制度の意味が希薄化した現在では、農民の兼業化を促進させる要因ともなっているという。このような状況を、著者は農業の衰退とは捉えず、逆に兼業にこそ農業の持続的発展を見出そうとする。しかし、今日では環境問題が民営企業の存続を左右している。辛集市では、1996年の国务院通達により、郷鎮工業団地への皮革工場を中心とした工場移転、集中コントロールが始まった。厳しい環境保全基準は資金力の弱い中小企業の淘汰を招いたという。環境問題への対応が、今後の民営企業のあり方そのものにかかわってくると著者はみている。

続く第6章と第7章では、辛集市における農業構造を、統計を用いて説明し、農業政策を時系列に整理している。第5章までの分析が辛集市や新壘頭村

に絞られていたのに対し、第6章では河北省や中国全土と比較しながらこれを概観しており、同市の中国全土における位置付けが示される。また、中華人民共和国建国後の糧食購入販売体制の変遷が示され、食の中心をなす穀物の流通を政府がどのようにコントロールしてきたかが叙述される。一方、第7章では、土地政策の変遷と村の実情を解説する。具体的な土地利用について16戸の農家とは異なる事例を紹介して、宅地や公共用地、非農業産業団地の建設を例に、農地が、どのような形で農外転用されているのかを解説する。非農業産業団地の建設をめくっては、中国の一農村においてさえ、かなり戦略的な土地利用が試みられ、一部は成功を収めているという。

終章では、これまでの内容を振り返り、この10年の変化について概括する。細谷が強調するのは、農村における市場経済化の着実な「進行」である。国の農業政策は農村の自主的な動きを後押しする形で施行され、市場経済化の波は農民の意識にまで浸透していた。しかしながら著者は、辛集市新壘頭村の例が必ずしも中国全土に当てはまるわけではないことを認識しており、超大国中国の農村問題は未解決の世界的問題であると警告する。

### 本書の意義

本書の意義はまず、時宜を得た調査を行ったことに求められる。第1次調査（1993～94年）と第2次調査（2003～04年）との間に、中国では1999年の生産請負期間の延長、「農業構造調整」政策、2000年に始まる農村税制改革、2004年の「糧食流通管理条例」の発布、「三農政策」といった農業をめぐる構造改革が立て続けに推進されており、農村はまさに劇的な変化の渦中にあった。聞き取りという調査手法を用いたことで、本書はこの時期にしか表明され得ないであろう、「変化」に対する農民の意識をつかむことに成功している。

第2に、「家族」という視点から、戸籍制度や土地利用の問題を捉えていった点が挙げられる。人民公社建設、文化大革命、一人っ子政策など、中国における人民共和国建国後の政策は、家族という根本

的な人間関係をも視野に入れて展開されてきた。改革開放もまた、「開放」という意味で単なる経済構造の変容に留まらぬ、意識や生活形態の変容をもたらしたと考えられる。本書では、事例農家に対する調査によって、土地制度や戸籍制度と連動して変容する家族意識が叙述される。政治制度と人々の意識や習慣が相互に影響し、時間をかけて社会秩序を形作る過程には、「制度」に対する中国特有の価値意識が垣間見られる。

第3に、事例研究によって、農産物の流通や環境問題への、農村の対応が詳細に示された点である。「三農問題」を解決するためのキー概念として時折目にする「龍頭企業」や「環境問題」は、中国特有の事象でありながら、その実態は明確にされていない。本書は対象を一地域に絞ったことにより、これらの具体例を詳細に記述し、個々の農民が「連鎖店」（チェーン店）や「農民連合経済組織」を通してどのように「流通」にかかわっているのか、また、懸念される環境問題に対して、農村がどのような取り組みを行い、それが如何に可能になったのかを納得する形で示し、読者に実態感をもって伝えている。

### 考察

では、本書によって、市場経済化の進展に伴う中国農村の変化は、どの程度明らかにされたのだろうか。

まず、モノグラフ的手法の妥当性について考えてみたい。冒頭に紹介したように、本書は統計を用いず、ひとつの事例を綿密に分析することによって実態を明らかにしようとする。細谷は、「社会現象ないし社会の動きの『論理』をつかみとる」（前著、6ページ）ところにこの手法のねらいがあるとし、調査に当たり、「経営規模、形態、農外就労の状況、所得水準などを勘案して、できるだけ様々な内容」（56ページ）の16戸の農家を選択している。その結果、穀物から経済性の高い商品作物に生産を移し、兼業によって農外に所得を求める農村の状況が示されてきた。だがこれに対し、第7章では、新壘頭村の全体状況として新たに9戸の事例を紹介することで、

これら16戸とは対照的な土地利用の状況を叙述している。それによると、村では畜産や商品作物の生産が減少しつつも、穀物生産は増加しており、農業所得が依然として「生計にとって、もっとも基本的な所得源となっている」(386ページ)という。一農村についての対照的な記述が解説抜きに示されており、読者は戸惑いを感じる場所である。その上終章では、「新壘頭村の農民たちは、請負耕地によって小麦やトウモロコシなどの粮食生産は続けてはいるものの、主要な所得源はむしろ各種の企業経営あるいは工場就労などの農外に求め、あるいは農業ならば畜産か果樹作を志向し、さらにはそれらの流通業に進出」している(424ページ)と、第7章の内容とはまた逆の概括をしているのである。いったいこの矛盾はどのようにして生じたのか、なぜ第7章で、それまでとは異なる事例を参照する必要があったのだろうか。

評者がみるところ、これには2つの原因が考えられる。国際共同研究における意思疎通の困難さと、モノグラフ的手法の限界である。調査に当たり、16戸の事例農家に多様性を求めれば、村全体の傾向をつかむことは逆に困難になる。細谷も認識しているように、結果的に16戸の比較的富裕な農家が選択されたことが推測される。そこから本書が示したのは、村における積極的变化の部分であり、全体の傾向とは必ずしも一致しない。問題は、著者たちでさえ、こうした研究手法の特性を共有していないようにみえることである。第7章では、村の一般状況を記述するために、新たな事例農家を提示しなければならなかったが、それについての意識的な解説は行われていない。このため、全体を通した論旨が散漫になっているのである。モノグラフ的手法を用いる際、統計資料との相互補完性は利用すべきであるが、注意深く用いなければ、調査の成果を混乱させる可能

性がある。本書でも、これについてももう一步踏み込んだ説明が欲しかった。特に、村全体の傾向と、本書で示した変化の部分が対照的方向を示していることについては、更なる考察が必要であろう。

第2に、本書では農村の貧困問題が言及されていない。中国の持続的発展を考えたとき、農村余剰労働力の移動は見過ごすことができない問題であり、その背景にあるのは都市と農村の経済格差である。新壘頭村は市場経済化の成功事例ではあるが、中国農村の抱える諸問題を明らかにするためには、市場経済化によって生じた「ひずみ」の部分にこそ注目する必要がある。例えば本書のなかでは、環境問題や市場競争によって淘汰された郷鎮企業や雇用農民らのその後のありように、そうした姿を垣間見ることができたのではないか。多くのダンボール工場が環境問題によって廃業に追い込まれ、皮革工場の数が大幅に減少したにもかかわらず、淘汰された人々がどうなったかを、本書は追っていない。だが、中国の市場経済化はむしろ、こういった「影」の部分の動きによって支えられているとさえることができよう。そのことが加味されていれば、「進展」や「変化」への考察がより重層的になったと惜しまれる。

表題にある「沸騰」は、転換期の中国経済における「混沌とした、しかし激しい動き」を表現したものだという。それは必然的に、この状況に対する論理的な調査・分析が困難であることを示すものである。それでも本書は、丹念な実地調査によって難題に挑み、10年という時間をかけて変貌する中国の実態を記録してきた。そのこと自体が、意義ある作業として評価されるべきだろう。加えて、本書が提示した農村の変化は、時期的にも問題の大きさからも、1冊の書籍に完結するような内容ではなく、今後に関わる発展的なテーマであると考えられる。

(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)